

ミステリ読書案内

2020. 1. 6 発行元

第28号 伊藤 剛

ミステリ総合誌「EQ」の思い出

私が大学を卒業した昭和52年（1977年）頃は、今にして思えば、ひとつのミステリ・ブームの時代だったのかもしれない。その頃の記念誌的な雑誌のひとつ『EQ』。今回はその紹介を試みようと思う。

.....

ミステリ総合誌「EQ」とは？

光文社発行のミステリの総合誌『EQ』は、1978年の創刊。その前年にエラリー・クイーンの一人（クイーンは2人の合作筆名）であるフレデリック・ダネイの来日があり、光文社主催の松本清張との対談などが実現した。そんな流れの中で、後述のアンソロジーの話や雑誌出版の話が進んだものと思う。

『EQ』は隔月刊で、1年に6冊。20年続いて、1999年7月号が最終巻。130号で休刊となった。もちろん、私は全巻揃いで持っている。日本のミステリ雑誌の中では、HMM（ハヤカワ・ミステリ・マガジン）と並び、最も純粋さを感じさせる構成だったと思っている。

エラリー・クイーンのブーム

『Yの悲劇』や『国名シリーズ』の作品で有名なエラリー・クイーンは、編集者としても活躍し、旧作・新作のミステリ作品の掘り起こしに大きく寄与した。アメリカでの『EQMM』の発行は、その発表手段の大きな役割を担った。

この私の『読書案内19号』で紹介した『ハヤカワ・ミステリマガジン』。1956年のスタート時は『EQMM』の特約・日本語版だったが、その後まもなく独自路線に転換し、しばらくの間日本版『EQMM』は途絶えた。それを光文社が復活して引継いだ形になった。当時の、日本でのクイーン・ブームに乗ったとも言えるだろう。

HMMとの両立の時代

よって、1978年からの20年間は、『HMM』と『EQ』の2つのミステリ専門誌が並び立つことになったわけである。

すでに書いたように、私の学生時代のミステリ読書は海外ものがスタートだったので、2つの雑誌には本当にお世話になった。何を読もうかと思う時の適確な指針になってくれたと感謝している。

スタート直後には、ビッグ・ボナナスのような形で、長編の連載も目玉になった。赤川次郎の『三毛猫ホームズの冒険』、デイリー・キング『鉄路のオベリスト』、西村京太郎『東北新幹線殺人事件』、三好徹『オ

リンピックの身代金』などと続いた。レックス・スタウトやメグレものもあった。

雑誌というのは表紙の紙が薄いので、傷みやすいのが欠点だ。『EQ』も表紙の紙が薄い。本棚の中で、長い時間が経つと、擦れてしまいやすい。私の生涯の度重なる引っ越しの繰り返しの途中で何度も箱詰めしたので、創刊号の表紙は、端が少し擦り切れてしまった。雑誌は、なかなか保存が難しい。

アンソロジーも出版されて

雑誌『EQ』発刊に合わせて発行された『日本傑作推理』のアンソロジーも取ってある。光文社のカッパブックスから出版されたものだ。日本ミステリの傑作短編をクイーンが選者になって本にしたもの、ということになっている。

このシリーズでは『&one』を含めて4冊刊行されている。アメリカ、ヨーロッパでも翻訳刊行の計画だったようだ。実際に出たかどうかは私にはわからない。1980年代初期はアンソロジーがあちこちの出版社から出た記憶がある。

エラリー・クイーン自身のミステリ作品の『ベスト表』は、すでに『読書案内』の5号に掲載した。ただ、作家論・作品論の形として書き足りないことも多々あるから、また別の号で再度特集を組むことになるだろう。

海外ミステリ

この1冊・連載12

A・バークリー『毒入りチョコレート事件』

アントニイ・バークリーは2つの名義を使い分けている。もうひとつの名前は、フランシス・アイルズ。アイルズ名義でも『殺意』『レディに捧げる殺人物語』などの傑作を書いている。バークリー名義では『トライアル&エラー』もある。いずれも創元推理文庫から出ている。今も買えるのだろうか？ 私が持っている創元版の表紙絵は、毒々しい色遣いで、描かれているイラストも怖い感じである。

1929年の作。送られてきたチョコレートを食べての殺人事件。「犯罪研究会」の会員6名が、いろいろの角度から分析し、それぞれの推理を展開する物語。「理論的推理小説」との副題がついている。その意味で、日本人好みの推理小説らしい推理小説である。この古典的名作は、日本の作家の着想を刺激するようで、『毒入りチョコレート』の題名のもじりのミステリ作品も時々見かけるし、推理合戦の場面を引用したもの、パロディ・パスティーシュ……もよく見かける。